

1. 本事業の背景と目的

1.1 田原市における取組と「お散歩」活動について

田原市及び合併により同市となる前の田原町・赤羽根町・渥美町は、これまでさまざまな出版を通じて地域の魅力の源泉となる文化的資源を紹介してきた。たとえば、各町史、「田原の文化財ガイド」シリーズや、各種の観光パンフレットはその代表的なものである。だが、これらは通常、学識経験者やコピーライターなどの専門家の手になるものであり、住民参加のワークショップのような手法がとられることはほとんどなかったと思われる。また、観光パンフレットや一部のガイドブックは別として、こうした刊行物の多くはあくまで屋内で読んだり、調べたりするために使われることを想定したものであった。

もちろん、田原市内で地域の文化的資源を調べるための住民参加によるワークショップが行われたことは、過去にもある。たとえば、本事業でも参考にした『福江地区活性化ビジョン策定業務報告書』（田原市、平成19年6月）の作成のプロセスでは、福江小学校区を中心とした地域の魅力を発見するための住民参加のワークショップが行われ、その成果が同報告書には掲載されている。しかし、同報告書はその内容を広く公開するために出版されたものではなく、図書館でも所蔵していない。それでも記録が残っているのはいい方で、過去に行われたワークショップの成果の大部分は記録に残ることなく、忘れられていったことだろう。

近年では、地域の文化的資源の調査をもとに収集した古地図・古写真等をデジタルアーカイブとしてまとめ上げ、スマートフォンやタブレット型端末用のアプリで古地図を閲覧するようなまちあるきの楽しみ方も提案されている。それらの古地図のデータをグーグルマップ等の現在の地図データと組み合わせ、GPS機能によって現在地の表示を行えるようにした「地図ぶらり」シリーズ（「初三郎ぶらり」「小布施ぶらり」「伊勢ぶらり」などが公開済み）の特徴の一つは、その制作の過程においても、活用の過程においても、「お散歩」活動とでも呼べるような住民参加型のさまざまなワークショップが行われていることである。これらのワークショップの特徴は、印刷媒体の紙の状態では不可能な電子媒体の特性によるものである。たとえば、データの編集が容易かつ柔軟であるがゆえに、デジタル化した地図の上に画像情報やテキスト情報、さらには動画情報までも埋め込むことが可能になっている。また、電子書籍全般についていえることだが、公開時のフォーマットをさまざまな形式に変換することが容易にできるため、携帯端末の特性に合わせた情報公開が可能となっている。

田原市が図書館と大学が連携した地域活性化の試みとして電子書籍の制作に取り組んだ背景は以上のとおりである。

1.2 本事業の目的

本事業の目的は、以下のような視点から、電子書籍の可能性を検証し、制作から活用にいたる道筋を検討することにある。

(1) 地域の存在価値を目に見えるようにする

すなわち、田原の魅力の要素となっているさまざまな文化的資源を発掘し、デジタル化して電子書籍にまとめ、インターネット等を活用して広く一般に公開する。これによって、たとえば学習教材として市民にその価値を伝えたり、観光ガイドとして田原市内外に発信したりすることが可能になる。

(2) 地域に密着した新たな図書館の具体的なイメージを示唆する

たとえば地域を調査するワークショップを行い、その成果を電子書籍にまとめ発信をおこなうといった活動の拠点となる。電子書籍は印刷物としての書籍よりも制作が容易であり、地域文化の活性化のための有力なツールとなりうる。図書館はその制作と発信の拠点のひとつとして、他の機関（博物館、大学・学校、企業、市民団体等）と連携していく。

(3) 未来の「司書」教育のモデルを提示する

すなわち、図書館という建物や制約にとらわれず、ワークショップに参加したり、電子書籍を編集したりすることを通じ、(2)に述べたような意味で図書館を支える人材に育つことが期待される。

2. 本事業の概要

(1) 業務の名称

田原市「お散歩 e 本」刊行実験事業実施業務

(2) 業務の実施主体

本事業の業務は、平成 24 年度に、田原市が愛知大学に委託したものである。実際には、田原市は図書館、愛知大学は文学部図書館情報学専攻教員が業務を主管し、実施にあたった。

(3) 業務の内容

- ① 田原市内の清田・福江両小学校区を愛知大学と田原市図書館が協議のうえ指定し、当該地域の電子書籍版ガイドブック「お散歩 e 本」にまとめ、ウェブ上に公開すると同時に、図書館に配置されているタブレット型端末（iPad）に実装した。

- ② 制作にあたっては、当該地域の散歩とインタビューを中心とするワークショップを実施し、その成果を反映した。このワークショップを実施するために、皇學館大学の協力を得た。ワークショップには、愛知大学・皇學館大学の教員・学生と、田原市職員（図書館員及び福江市民館主事）が参加した。
- ③ 「お散歩 e 本」の完成後、田原市内において、その成果や課題を検討し、周知するために「おひろめ会」を開催した。
- ④ ①から②までの経過や成果を分析することにより、田原市における、地域に密着した新しい図書館像についての提言等を、本報告書にまとめた。

3. 事業成果

3.1 ワークショップ

3.1.1 開催概要

(1) 本ワークショップの目的

①地域の存在価値を目に見えるようにする。

従来省みられることの少なかった、田原市内の各地域のさりげない魅力を構成するモノやコト、その地域らしさの源となるような地域の住民の記憶などを文化資源として発掘し、一冊の電子書籍＝e（いい）本にまとめてウェブ上に公開することによって、「ふるさと学習」の教材等として地域独自の存在価値を住民自身が再認識できるようにすると同時に、観光ガイド等として、田原市内外に発信する。

②地域に密着した新たな図書館の具体的なイメージを示唆する

「お散歩 e 本」は、今後の図書館のありかたについて、貸出や閲覧による資料提供の機能に加え、人々が交流するカフェ的機能、コンテンツを編集し制作するスタジオ的機能などを複合的に有するような、具体的なイメージを示唆する。

③未来の「司書」教育のモデルを提示する。

「お散歩 e 本」の制作を通じて培われる、地域の文化資源の発掘・編集・公開・活用のプロセスを遂行する能力は、これからの「司書」に求められる重要な能力となる。司書資格の取得を目指す学生や、図書館情報学の基礎を学ぶ学生に対し、ワークショップ等を通じてこのプロセスを体験させることにより、未来の「司書」教育のモデルを提示する。

(2) プログラム

◆日時：2012年8月24日（金）

◆場所：福江地区

◆内容：「観光者が見た田原の歴史・田原の宝」

◆スケジュール

①渥美図書館（11:00）

⑦潮音寺（13:05～14:05）

②田原市消防署渥美分署（渥美線福江駅予定地）

⑧観音橋、火のみやぐら

⑨下地常夜燈

③鉄道杭（11:10）

⑩古田の港（14:25～14:35）

④畠神社（11:18～11:30）

⑪須賀社（芝居小屋）

⑤杜国公園（11:40～11:50）

⑫与加楼（角上楼）

⑥さくや（昼食）（12:00～13:00）

⑬城坂（人造石）

⑭福江市民館

⑮渥美図書館



3.1.2 開催結果

(1) 参加者

参加者数 15 名（敬称略）

- ◆ 田原市 2 名（豊橋市図書館：豊田高広、福江市民館：近藤めぐみ）
- ◆ 愛知大学 2 名（教員：時実象一、学生：木下英恵）
- ◆ 皇學館大学 11 名（教員：岡野裕行、学生：稲葉梨紗、岩上奈々、奥野実希、澤村静香、下村有那、田窪宏美、濱田めぐみ、堀口みあき、山下あさみ、山本暉通）

(2) ご協力いただいた方

田原市福江市民館	川崎政夫氏
隣江山潮音寺	宮本利寛住職

(3) まちあるきの内容

- ◆ 参加者全員でまちあるきを実施した。
- ◆ 携帯電話やデジタルカメラを用いて、まちなかの歴史的記録や遺産の撮影をしながら移動した。
- ◆ 散策時間は約 4 時間。
- ◆ 当日は猛暑の一日だったため、十分な水分補給につとめ、体調に気をつけながら歩いた。

(4) まとめ

◆ まちの宝

「まちの宝」を探すという目的のもとに、観光者視点で福江小学校区・清田小学校区を歩いてみたとき、参加者からは以下のような意見が寄せられた。

- ① 渥美半島が神社領地だったというような、自分の身近なもの（ピンとくるもの）と接点があったことを発見すると、自分の世界が広がる。
- ② 杜国公園の俳句を入れる箱があるのが面白い。こういうものは設置してあるだけで利用されないイメージがあったが、自治体の人がしっかり管理している。
- ③ お寺が地域の方が集まって何かをする場所になっている。
- ④ なんとなく通りすぎていた風景ひとつひとつにある歴史を知れば、それだけでもずいぶん違った見方になるということを知ることができる。
- ⑤ 畠神社には伊勢との繋がりである「遥拝所」もあった。
- ⑥ 「火のみやぐら」は、街並みに突然表れるところが印象的でした。
- ⑦ 昔はやぐらの周りが物流の中心地で、栄えていたというエピソードに時の流れが感じられた。
- ⑧ 紀行文によく登場する「常夜燈」は実際に灯がついていた。

- ⑨ 潮音寺には多くのプロ野球選手が使い終わった野球道具を納めに来る場所でもあった。
- ⑩ 潮音寺の和尚さんは自分のお寺を大切に思うだけでなく、生きているお寺＝人がたくさん出入りするお寺にしようとしているところに感銘を受けました。渥美半島からは、陸を使うことより海を使う方が近かったので、海をよく使った。
- ⑪ 潮音寺は花のお寺とも言われているようで、中でも藤と牡丹が有名で、時期になると地元の方だけでなく、遠方からも多くのお客さんが訪れる。
- ⑫ 境内には、芭蕉の愛弟子、杜国の墓があり、その横には師弟三吟の句碑があった。また、俳人山頭火や山口誓子の句碑も境内にあり、俳句愛好家の方や研究者の方も多く訪れるという。
- ⑬ お寺は「生きた場所」つまり地域の方が自由に訪れる事が出来る場所でなければいけない。地域文化の発信基地としての役割を果たしている。
- ⑭ 軒先にウェットスーツを吊り下げている民家を見つけることもでき、港町ならではの光景を見ることができた。
- ⑮ 海と山がとても近いということだ。海から山のほうへ向かって歩いて行くと直ぐに急な坂道にあたる。
- ⑯ 京都の寺のようにお金を取って観光客に見せるような寺は本当に生きた寺ではない。地域に愛されてこそ本当の生きた寺だ。
- ⑰ 昔、渥美半島の一部が伊勢の神宮領であったこと、伊賀出身の松尾芭蕉が渥美半島を訪れているということなど、私の地元三重ともつながりがある。

◆地域の文化資源の発掘プロセス

「まちの宝」を探し、それを図書館が発掘・編集するという作業について、司書課程を学ぶ学生たちからは以下のような意見が寄せられた。

- ① 図書館には地域資料を収集・保存・公開するというひとつの役割がありますが、実際にまちを歩くことで、その地域の歴史や風土を体験するという企画はとてもいいと思う。
- ② まち歩きの企画は小中学生にも広めることで、図書館の利用教育の一環にもなると思った。
- ③ 住民にその地域に対する理解を深めていただくとともに、図書館などの公共施設の活動への理解・感心を深めることに繋がる。
- ④ 図書館が地域の情報発信拠点となる。
- ⑤ まち歩きの企画を行うためには、地域の公共施設などとの連携を図ったり、図書館員が地域住民と積極的に触れ合ったり、地域理解をより深めたりしなければいけないと思う。

- ⑥ 図書館は知識や情報を世間に提供することが仕事の一つであるため、図書をはじめとした資料を集めるとか、人々が来館しやすい環境を作るとかだけではなく、時には図書館自体が自分の足で動いて情報を集めることも欠かせないと感じた。
- ⑦ 図書館が自分達の町のことを調べて保存していくのは、地域のためにある公立図書館としては良いことだと思う。集めた情報は自分の地域を知りたいと思う住民への資料の材料になるし、図書館側も地域の特色を見直すことでより地域に密着したサービスを提案できるのではないかと思います。
- ⑧ 今現在の地域の情報や置かれている状況、あるいは建造物などといったものも、時間が経てばそれは「まちの歴史」の一部になっていくはずで、昔のものを集めて保存・公開するのは大切だとは思いますが、今のまちの様子をまとめて保存・公開するのも必要だと思います。
- ⑨ 公共図書館の仕事は資料を提供したり保存したりといった業務だけでなく、地域に積極的に関わっていき、地域の文化や歴史を人々に広く伝え、文化的な面を活性化していくことも前者と同じくらい重要だと考えられる。
- ⑩ こういったイベントを開催することで、人々に自分の住んでいる地域や図書館に対する興味・関心を持ってもらうことも重要である。
- ⑪ 自分の生まれ育ったまちに長年に住んでいても、それについて調べたことがあまりなく、地域に関する情報について詳しいとは言えない。利用者が研究や調査のために求める情報を提供するだけでなく、図書館側から町の情報を発信してくれたら、身近すぎて見過ごしがちな情報も得られ、面白くなるのではないかなと思う。
- ⑫ 今回のイベントで、まちあるきをすることに関心を持つようになった。自分の住んでいるまちについても知らないことが多いと気づき、行事やお店や歴史など、もっとまちのことを知りたいと考えるようになりました。
- ⑬ 図書館利用者増加にも繋がると思う。図書館はどんどん自由に新しいことに挑戦して行ってほしいと思う。

3.2 「お散歩 e 本」編集とデザイン

(1) 「お散歩 e 本」のアウトラインとテキスト

本文のアウトラインとテキスト本文は皇學館大学岡野の指導で学生が作成した。また各項目の解説部分は、田原市図書館渥美分館の横田が資料から引用した。

(2) 写真、動画と絵地図

写真はワークショップにおいて参加者が撮影したものが中心であるが、一部田原市図書館渥美分館の横田が撮影したものもある。

動画は時実が撮影した。絵地図は皇學館大学の学生が製作した。

(3) 詳細地図

各項目に掲載した地図は、時実が国土地理院の電子国土基本図を「電子国土ポータルサイト（電子国土 Web.NEXT）」(<http://portal.cyberjapan.jp/site/mapuse4/>) で検索し、加工して用いた。

(4) モックアップの作成

電子書籍および配布用の冊子の骨格となるモックアップは、上記テキストや写真を元に、時実が作成した。この過程で文章の添削やスタイルについて議論を重ねた。

(5) 表紙と冊子体本文デザイン

表紙と冊子体本文デザインは外注した（アトリエピコロ 〒569-0853 大阪府高槻市柳川町2丁目6番6号、デザイナー 辻浩子）

表紙、裏表紙のデザインは EPUB でも使用した。

3.3 EPUB 作成

3.3.1 EPUB とは

EPUB は、アメリカの電子書籍標準化団体である国際デジタル出版フォーラム IDPF(International Digital Publishing Forum、旧 Open eBook Forum)が開発し、2007 年にリリースされた。EPUB は視覚障害者のための録音図書形式 DAISY を元としている(河村宏. デジタル・インクルージョンを支える DAISY と EPUB. 情報管理. 2011, 54(6), 305-315.)。アメリカの Sony の電子書籍販売サービスや、Apple の iPad、Google などが採用、または採用方針を発表したことで、アメリカでは事実上の標準フォーマットとなっていた。CSS、HTML、画像などを ZIP ファイルにまとめたもので、ウェブのノウハウを生かして電子書籍が制作できる特徴がある。

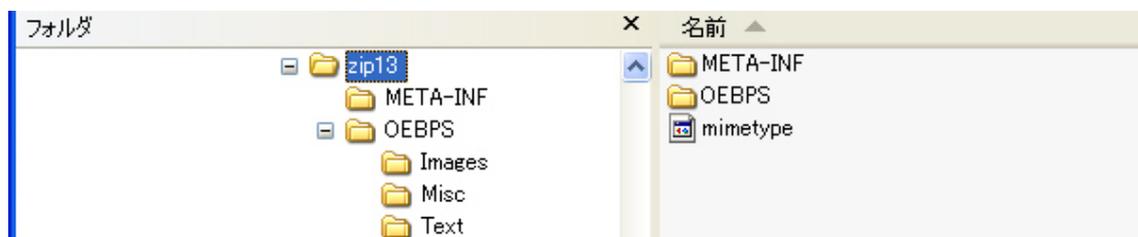
EPUB は、オープンな規格である、リフローができる、メタデータを持つ、拡張性が高いなどの特徴がある。商業的電子書籍ではそれぞれ独自の形式を持っているが、ほとんどが EPUB を入力形式として受け入れている。

現在 EPUB の次の規格 EPUB3 が公表されているが、これは DAISY4 と同一である。その特徴は EPUB の特徴に加え、新しいウェブ技術、HTML5 や CSS3 に対応しているため、日本語の縦書きやルビに対応するほか、音声や動画を組み込むこともできる。すでに紀伊國屋書店の Kinoppy が EPUB3 に対応することを発表しているほか、他の電子書店も順次対応していくことと思われる。

電子書籍の特徴の 1 つは、文字の大きさを変えると、それに応じて 1 行中の文字数、1 ページ中の行数が変化することがある(リフロー)。EPUB で作成した電子書籍はこのリフローに対応している。

3.3.2 EPUB の構造

EPUB ファイルは実際は zip ファイルであり、中身は次のような構造になっている。

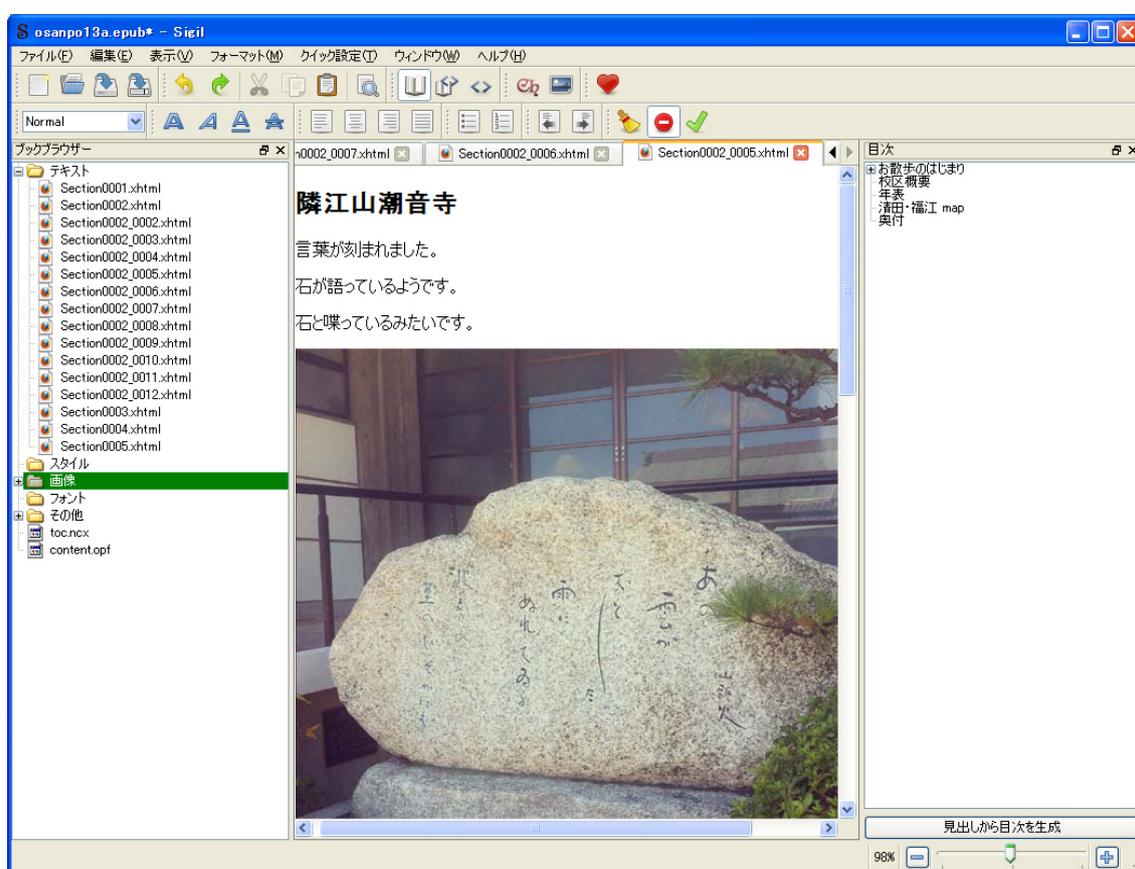


すなわち、ルートに META-INF、OEBPS、mimetype のフォルダとファイルがあり、OEBPS フォルダ内には Images、Misc、Text などのフォルダがある。EPUB の本体のファイルは Text フォルダにある XHTML ファイルである。

XHTML ファイルは HTML をより厳格にしたもので、特徴としては、開始タグに加えて必ず終了タグがあることがあげられる。これらのファイルを zip 圧縮して、拡張子を epub としたものが EPUB ファイルである。

3. 3. 3 EPUB 形式の電子書籍の作成

EPUB の作成は、愛知大学図書館情報学専攻の四年生、木下英恵、が卒業研究の一環として担当した。最終的には時実が編集をおこなった。EPUB 作成のツールとしては、フリーソフトの Sigil を使用し、仕上げの編集にはテキスト・エディターを用いた。Sigil の作業画面を示す。



EPUB には動画を埋め込んだ。動画は時実が撮影したものを加工した。埋め込みは Sigil では難しいので、テキスト・エディタ (MIFES for Windows Ver 7.0) を用いた。作成の詳細については「資料編」に収録した。作業手順の概略は次のとおり。

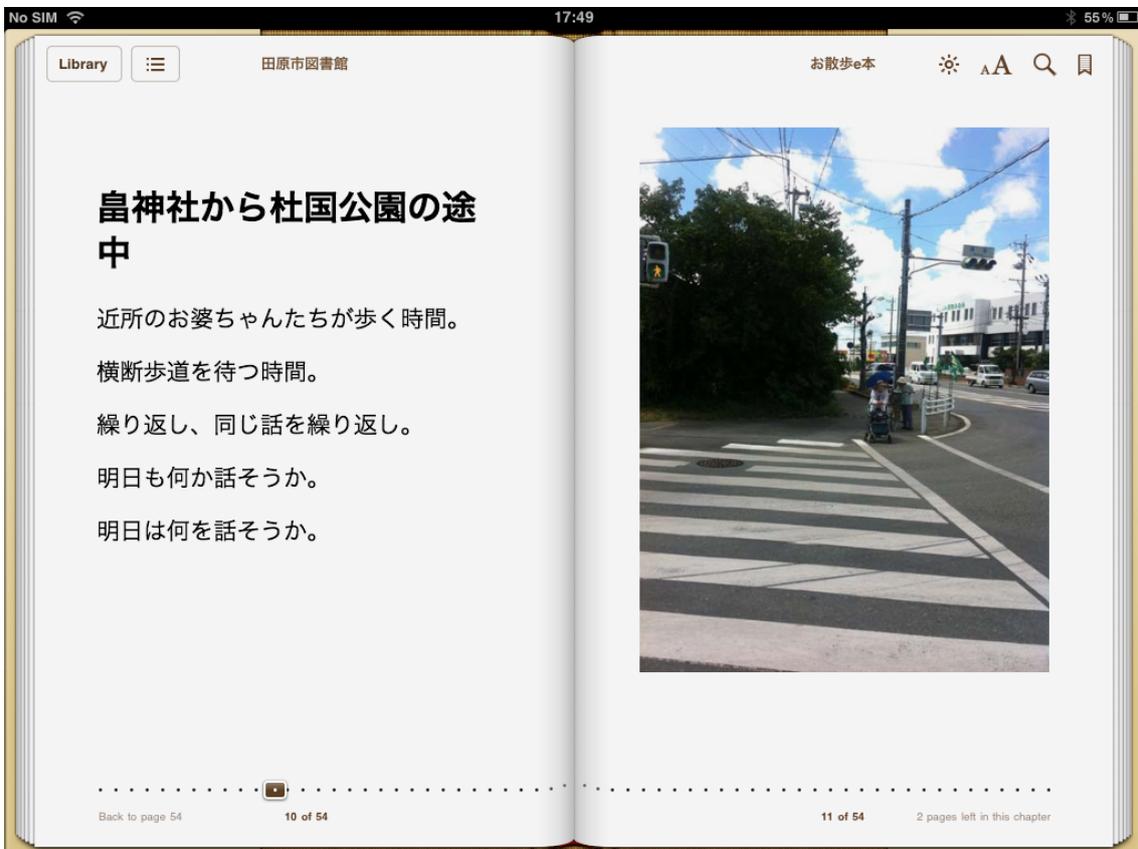
- a. Sigil で各ページのたたき台を作成し、写真を張り込む
- b. EPUB を出力する
- c. .epub を .zip に書き直し、zip ファイルとして開く

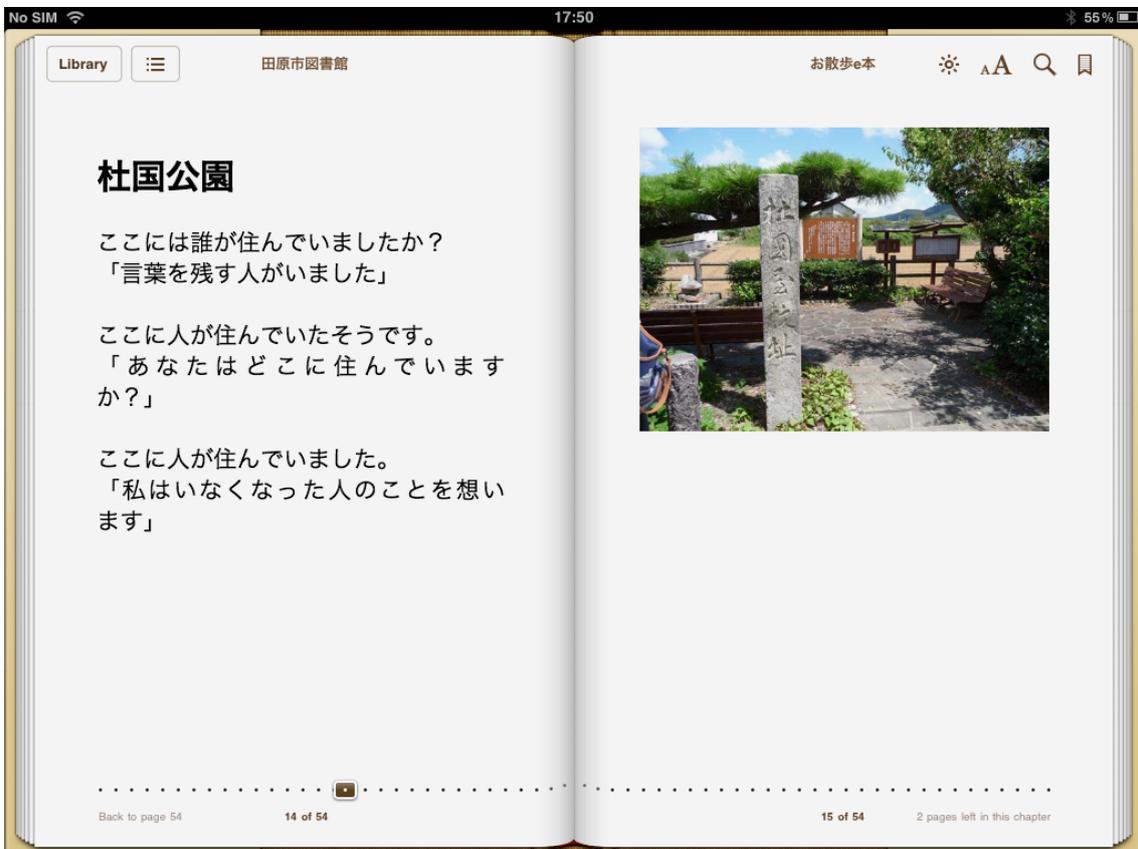
- d. 各ファイルを編集する、この際に動画などを貼りこむ
- e. zip 圧縮する
- f. .zip を .epub に書き直し、EPUB リーダで検証する。

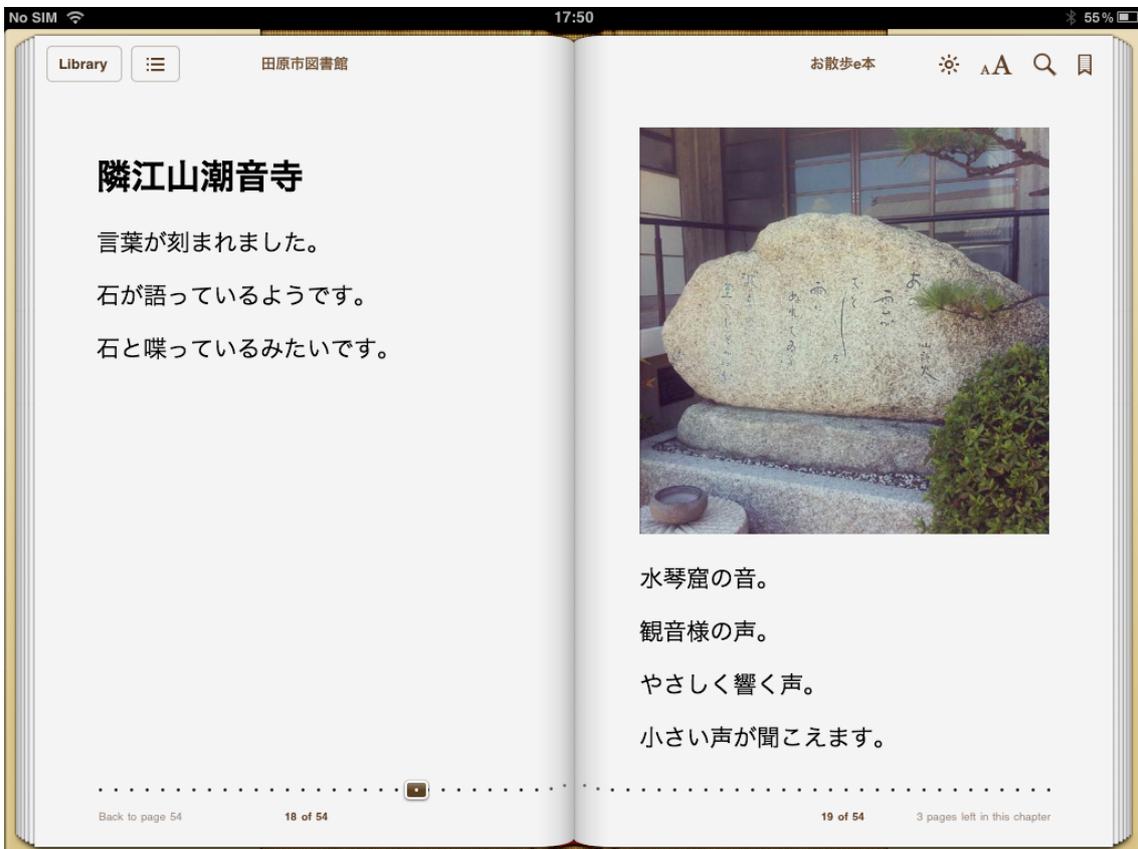
実際には c から f のサイクルを繰り返して編集・校正をおこなった。完成した EPUB を iPad の iBooks で表示したものを以下に示す。













隣江山潮音寺

【豊鉄バス伊良湖本線「渥美ショッピング前」下車、徒歩5分】

1387（嘉慶元）年に月江正公和尚が諸国行脚の末、風光明媚なこの地に至り、当

時浜辺であったこの地に庵をむすんだといわれている。朝夕、汐の香をかぎ、かすかな波音を聞いたので、潮音堂と呼ばれた。1674（延宝2）年、常光寺の東石和尚によって、隣江山潮音寺と改称されて今日に至っている。境内には、1744（延享元）年に建てられた、芭蕉の弟子の俳人坪井杜国の墓碑があり、その横には芭蕉・杜国を慕う万菊社の人々によって1896（明治29）年に建てられた師弟三吟の句碑がある。（渥美半島 郷土理解のための32章 愛知県立福江高等学校編集）



隣江山潮音寺

野球は一人ですものじゃないけれど、修行をするのはいつも一人きり。



【豊鉄バス伊良湖本線「渥美ショッピング前」下車、徒歩5分】

「昭和卅三年渥美消防団福江分団竣工」というプレートがありました。たくさんの方たちの命を守った防災のシンボルです。

火の見やぐら下地常夜燈



下地常夜燈

【豊鉄バス伊良湖本線「福江」下車、徒歩10分】

昔の福江の町のメインストリートだったころの名残。
(福江の校区を探検したい 田原市図書館)



古田 (こだ) の港

遠くから船がやって来る。

船を動かすのは誰？

蟹と遊ぶのは誰？

時間はいつものように進む。

海はいつものように開いている。

船着場の時間は止まっている。





須賀社



【豊鉄バス伊良湖本線「古田坂上」下車、徒歩5分】

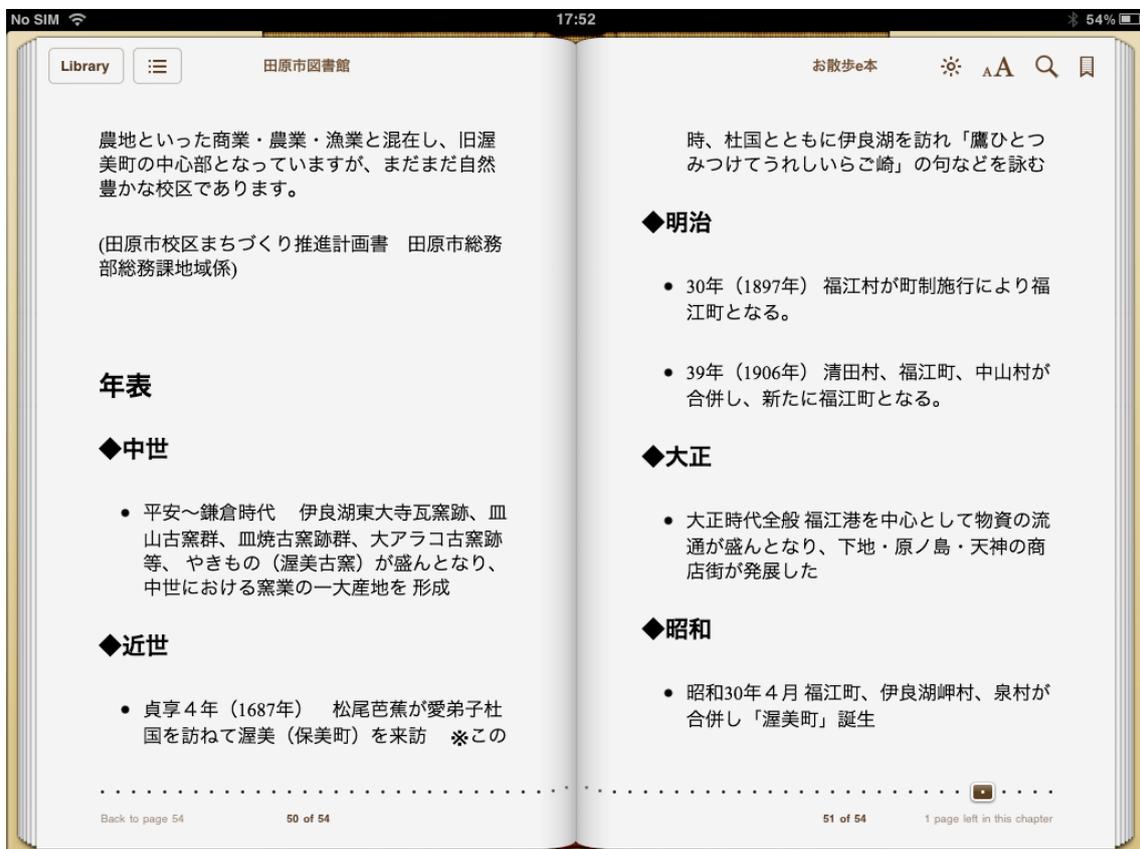
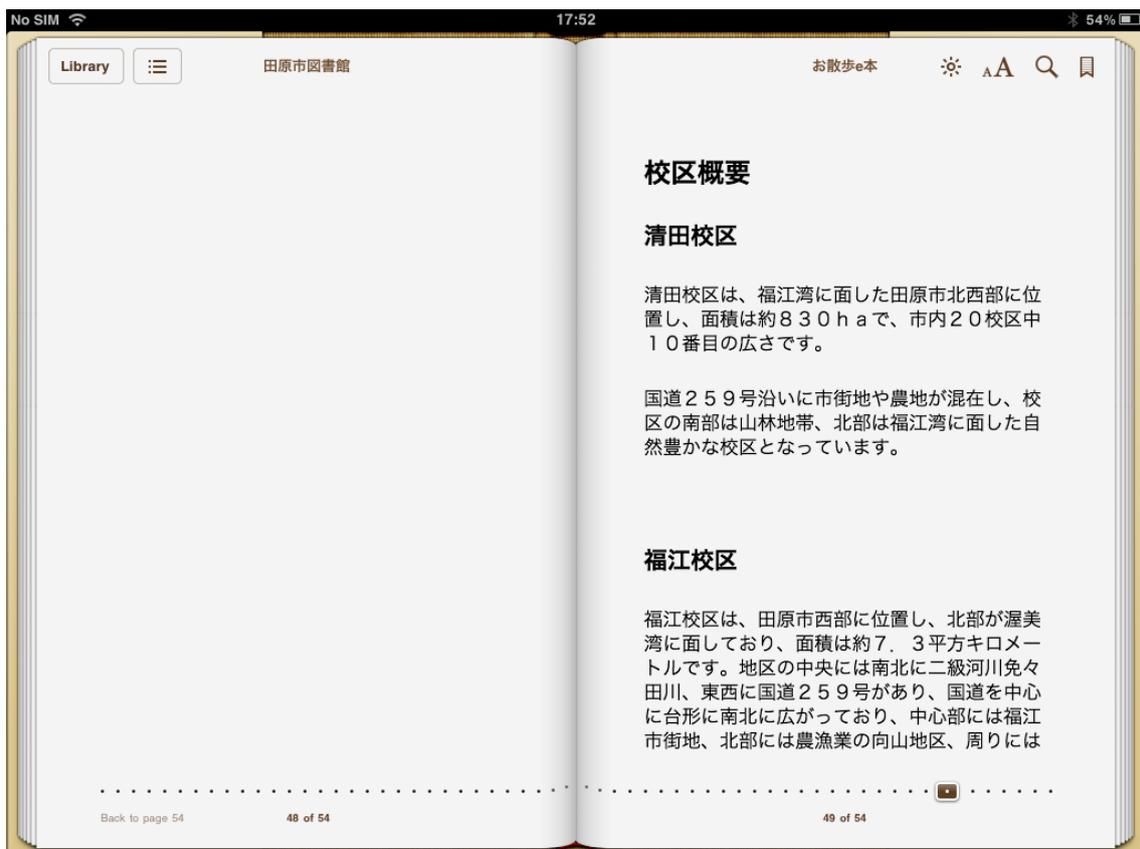
創立・勧請年月日不詳、祭神 須佐之男命
寛文10(1670)年11月15日、領主戸田淡路氏経から黒印状を受け、以後代々の継目をし明治に至った
(渥美町の神社 渥美町町史編さん委員会)

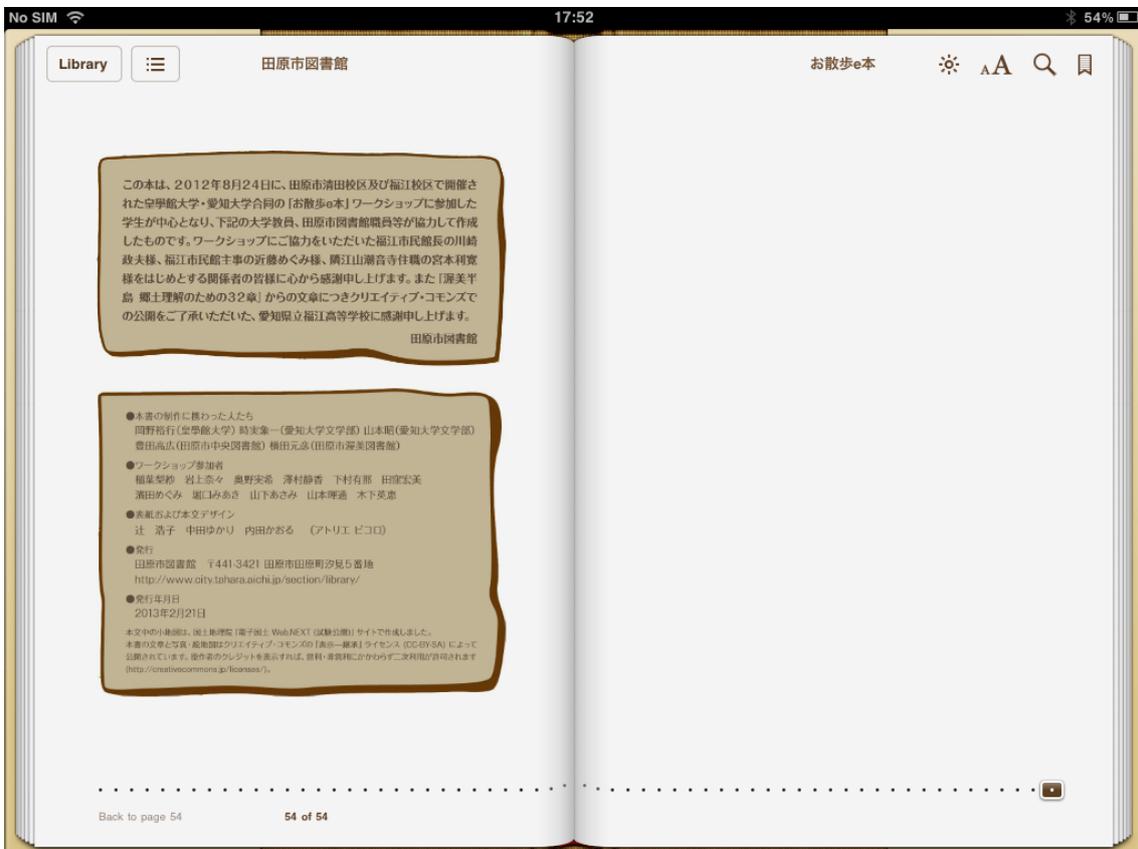
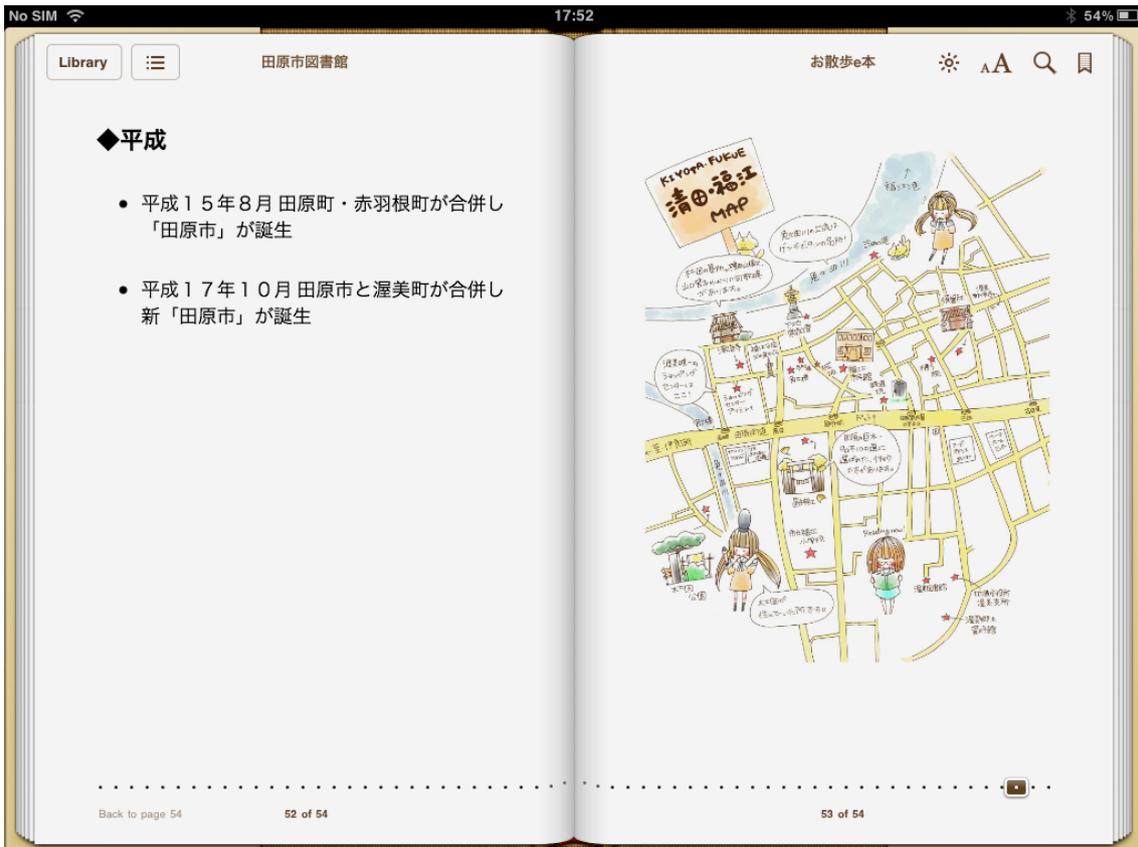
神社脇の狂言場に定小屋(屋根付き舞台)があり、古田の天王まつりの際、青年団を中心にして演芸大会が催されていた。地元の人等の素人芝居や地方巡業の芸人、映画会などが盛大に行われていた。
(渥美町の民俗探訪 愛知渥美町農業協同組合(筆者注:「定小屋」は近年取り壊された))











3.3.4 EPUB の閲覧

作成した EPUB は EPUB リーダーで閲覧する。リーダーには以下のようなものがある (電子書籍情報まとめノート. http://www7b.biglobe.ne.jp/~yama88/epub_reader.html (閲覧 2013/3/4))。

▼PC(Win、Mac)向け

	Win	Mac	iOS	Android	3.0	縦	備考
 Readium	○	○			対応	✓	Google Chrome Ver.15以降
 Adobe Digital Editions	○	○					Ver1.8で縦書きに対応する
 Fire Fox アドオン EPUB Reader	○	○					
 espur	○				対応	✓	(試作版 v0.8)
 Murasaki		○			対応	✓	スクロール型、EPUB3一部対応 OS X 10.6.6以降、有償or無償版
 Yahoo!ブックストアリーダー	○	○		○	対応	✓	固定レイアウト

▼iOS向け

	Win	Mac	iOS	Android	3.0	縦	備考
 iBooks			○			✓	EPUB3に一部のみ対応 (ページ送り未対応)
 stanza			○				
 bReader			○		対応	✓	青空形式、TXT、ZIP、PDF対応
 Kinoppy			○	○	対応	✓	青空形式、TXT、ZIP、PDF対応 フリーのXMDFも読める

▼ Android向け

	Win	Mac	iOS	Android	3.0	縦	備考
 Copper Reader				○		✓	国産
 Himawari Reader				○	対応	✓	国産、スクロール型 縦書き対応は一部機種
 Aldiko				○			
 Moon+Reader				○			
 StarBooks				○			

▼ オンライン閲覧型……オンライン上のサーバーにファイルをアップロード

	Win	Mac	iOS	Android	3.0	縦	備考
 ibis reader	○	○	○	○			要登録
 bookworm	○	○	○	○			要登録
 BiB.li BiB.liophile	○	○	○			✓	国産 αテストサービス中

▼ 電子書籍端末

	Win	Mac	iOS	Android	3.0	縦	備考
 Sony Reader					対応		固定レイアウト型EPUB3に対応
 biblio leaf sp02							EPUB表示可能
 ISTORIA							EPUB表示可能

今回は iPad で読めることが前提であったが、以下の無料のリーダーでも確認をおこなった。

リーダー	提供元	デバイス	
iBooks	Apple	iPhone/iPad	
Readium	Google	Google Chrome (ブラウザ)	
EPUBReader	epubreader	Firefox (ブラウザ)	
Adobe Digital Editions	Adobe	PC, Mac	
espur	イースト	PC	

3.4 bookpic での公開

3.4.1 電子書籍のインターネット公開

デザイナーによってデザインされた表紙と本文を用いて、電子書籍のインターネット公開をおこなうことにした。一般が利用できる公開サイトには次のようなものがある。

	提供者	出版費用	無料 本	投稿形式	リーダー	URL	注
bookpic	株式会社美術出版ネットワークス	無料	○	JPEG	ブラウザ	http://bookpic.net/	
iPadZine	株式会社ライブアウト	無料	○	pdf, EPUB	PDF, iBooks, EPUB, i 文庫	http://www.ipad-zine.com/	投稿サイト
ePubs.jp		無料	○	EPUB	ダウンロード	http://epubs.jp/	投稿サイト
SPOTWORD		無料	○	テキスト、EPUB		http://spotword.jp/	投稿サイト
パブログ	株式会社ランドマークス	無料	○	ブログ記事	EPUB リーダー, iBooks, Stanza	http://www.publog.biz/	ブログ
novelist.jp	株式会社シンカネット	無料	○			http://novelist.jp/	投稿サイト
uppi	株式会社パピレス	無料	○	EPUB, テキスト	ブラウザ	http://uppi.com/	
学研電子ストア			○		iPhone/iPad アプリ	http://ebook.gakken.jp/gstore/	投稿の審査あり
パプー	株式会社ブクログ	無料	○	画像、テキスト、		http://p.booklog.jp/	

				PDF, EPUB			
wook	株式会社キングジム	4,500 円/ 月	○	PDF, EPUB, テキスト	PC ビューア、iBooks, Android アプリ	http://wook.jp/	
forkN	シーサー株式会社		○	テキスト、PDF, EPUB、ブログ	bookend (PC, Mac, iOS, Android)、PDF, EPUB	http://forkn.jp/	
Paberish	カヤック		アプリが有料	テキスト、画像	iPhone スクロールブック (アプリ)	https://paberish.me/	
DL-MARKET	シーズネット株式会社			何でも	ダウンロード	http://www.dlmarket.jp/	マーケットサイト
でじたる書房	デジバンク株式会社	無料		PDF	PDF ダウンロード	http://www.digbook.jp/	審査あり
eブックランド	eブックランド	50,000 円	○	PDF	PDF	http://www.e-bookland.net/	
BookWay	小野高速印刷株式会社	10,500 円 から	○	PDF, 組版データ、テキスト	AeroBrowser (リーダー)	https://bookway.jp/	
androbook	株式会社 VOYAGE GROUP	無料	○	JPEG, PDF	Androbook Viewer (Android アプリ)	http://androbook.net/	広告あり
iBookStore	Apple				iBooks 2 形式		日本未対応
Kindle ダイレクト・パブリッシング	Amazon		有料のみ		Kindle, Kindle アプリ	https://kdp.amazon.co.jp/self-publishing/signin	
Sony Publisher Portal	Sony		有料のみ		Sony Reader, アプリ	https://ebookstore.sony.com/publisher/s/	

今回はこれらのうち、bookpic を採用した。その理由は次のとおりである。

- a. 無料で登載、閲覧も無料で可能
- b. 美術系出版社のサイトなので、他の電子書籍がきれい
- c. 「つぶやき」や「いいね」が投稿できる

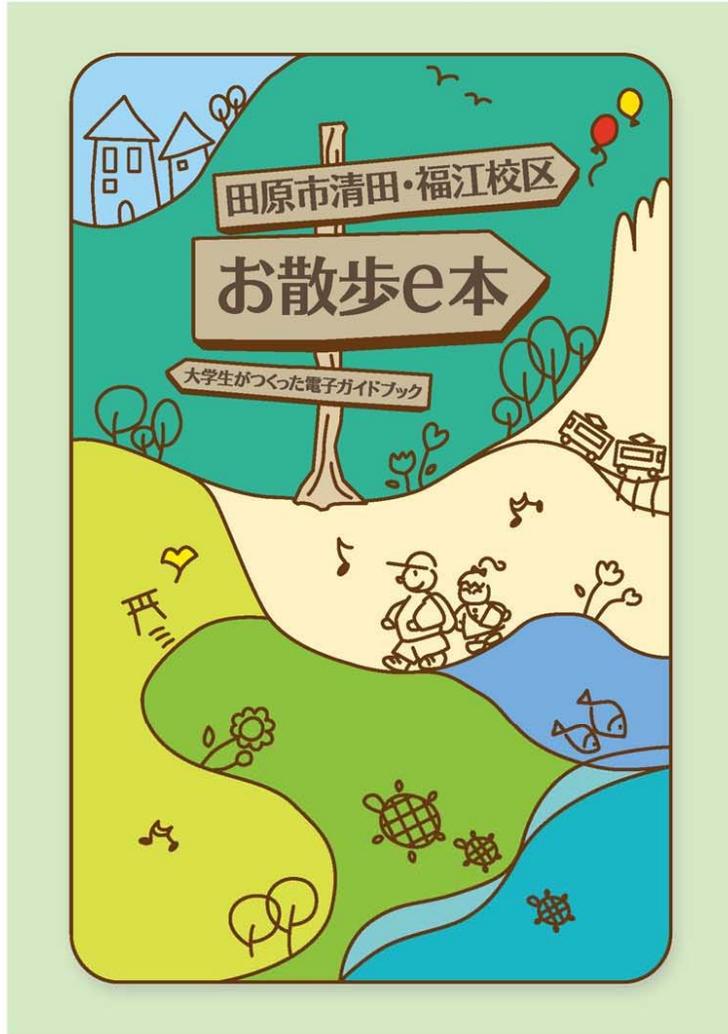
3.4.2 bookpic への登載

登載作業の詳細は資料編に記述した。データとしては、配布冊子用に用意したものから JPEG データを作成した。作業手順は次のとおり。

- a. bookpic editor をダウンロードしてインストール
- b. bookpic editor に JPEG を貼りこんで、本を作成
- c. 電子書籍データを出力
- d. アップローダーで電子書籍データをアップロード

詳細な手順は「資料編」に収録した。

bookpic で閲覧した「お散歩 e 本」の画面を以下に表示する。なおこれは、「おひろめ会」で配布した冊子とほぼ同一の内容であるが、ウェブサイトへのリンクや動画 (YouTube) へのリンクが貼ってあるところが異なる。



お散歩のしよまい

鉄道杭



みんなは杭のことを知らないらしい。
「工」の文字にも気がつかないみたい。
鉄道がやって来るはずだった場所に杭が残されただけ。
子どもたちがいつものように遊びまわっている。
杭が語る戦争の記憶。僕らの町の杭。渥美の真ん中の杭。
もしも予定通りに鉄道が開通していたら、渥美の町並みはどんな感じになったのでしょうか？



豊橋鉄道渥美線計画線の跡

【豊橋バス伊豆新本線「福江」下車、徒歩5分】

渥美線は、1924年、高部・豊島間で運行を開始、1927年に新豊橋・黒川原間が全通した。渥美半島の先端部まで建設する計画があったが、戦局が悪化したことで中断された。三河田原・黒川原間は戦中に廃止された。

(参考: 山崎洋介、「私鉄沿線」, p.180-181, 他)

畠神社

鳥居をくぐる彼女の足取りの軽やかさ。
 イチョウの木の枝が揺れる音よりもふわっと軽い足。
 私は鳥居の向こうの空を見上げながら後をついていく。



遙拝の向こう側には
 誰がいるの？
 私のことも見えますか？



畠神社

【伊豆半島伊良湖本輪「源美ショップ」下車、徒歩5分】

1667（寛文7）年の棟札に「五社八王子」とあり、1880（明治13）年に畠神社と改称した。1809（文化2）年の大改築では、瓦に悉く領主戸田氏の家紋を焼き付け、今もその古瓦が残っている。

（源美半島 郷土理解のための32章改訂版 愛知県立福江高等学校編集）



2

畠神社から杜国公園の途中



近所のお婆ちゃんたちが歩く時間。
 横断歩道を待つ時間。
 繰り返し、同じ話を繰り返す。
 明日も何か話そうか。
 明日は何を話そうか。



免々田川



螢は元気でしょうか？
 風車は今日も回ってますか？
 今年元気に飛ぶみんなに、
 来年もここで会いたいですね。



3

杜国公園



ここには誰が住んでいましたか？

「言葉を残す人がいました」

ここに人が住んでいたそうです。

「あなたはどこに住んでいますか？」

ここに人が住んでいました。

「私はいなくなった人のことを想います」



杜国公園

【豊鉄バス伊良波本線「保美」下車、徒歩5分】

坪井杜国（～1690年）は名古屋で米穀商を営む俳人であったが、空米相場の罪で畠村（福江）に追放され、保美に移った。芭蕉は1687年に門弟越智越人と保美の杜国を訪ねている。1960（昭和35）年に屋敷跡に石標が建てられ、1988年に杜国公園として整備された。杜国の「春ながら名古屋にも似ぬ空の色」の句碑がある。

（従美平島 郷土理解のための32章改訂版 愛知県立福江高等学校編集）



4

隣江山潮音寺



言葉が刻まれました。

石が語っているようです。

石と喋っているみたいです。



水琴窟の音。

観音様の声。

やさしく響く声。

小さい声が聞こえます。



隣江山潮音寺

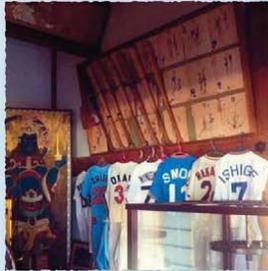
【豊鉄バス伊良波本線「潮音」下車、徒歩5分】

1387（嘉慶元）年、月江正公和尚が諸国行脚の末、風光明媚なこの地に至り、当時浜辺であったこの地に庵をむすんだといわれている。朝夕、汐の香をかき、かすかな波音を聞いたので、潮音堂と呼ばれた。1674（延宝2）年、常光寺の東石和尚によって、隣江山潮音寺と改称されて今日に至っている。

境内には、1744（延享元）年に建てられた、芭蕉の弟子の俳人坪井杜国の墓碑があり、その横には芭蕉・杜国を慕う万菊社の人々によって1896（明治29）年に建てられた師弟三吟の句碑がある。

（従美平島 郷土理解のための32章 愛知県立福江高等学校編集）

5



野球は一人でするものじゃないけれど、修行をするのはいつも一人きり。

隣江山潮音寺

精神の鍛錬の場所としての人気も高く、プロ野球選手も数多く訪問しています。堂内には選手から寄贈されたユニホームやバット、グローブ、ボールなども展示され、まるで野球博物館のようです。



蓮の花は綺麗に咲く。
自分が何でも知っているみたいに姿勢をよくしている。



6

火の見やぐら



やぐらの背中により登ったら速くまで見えた。
登って降りて、何度も登った。

町にそびえ立つその錆びた背中を、
今はそっと下から見守るだけ。



火の見やぐら

【乗換バス伊良湖本線「福美ショッピング前」下車、徒歩5分】

「昭和三年福美消防団福江分団竣工」というプレートがありました。たくさんの人たちの命を守った防災のシンボルです。

下地常夜燈

【乗換バス伊良湖本線「福江」下車、徒歩10分】

昔の福江の町のメインストリートだったころの名残。

(福江の校区を探検したい 田原市図書館)



7

下地常夜燈



古田(こだ)の港



速くから船がやって来る。
船を動かすのは誰？
蟹と遊ぶのは誰？
時間はいつものように進む。
海はいつものように開いている。
船着場の時間は止まっている。



古田(こだ)の港

【豊後バス伊良湖本線「古田坂上」下車、徒歩10分】

福江港は、昭和30年代まで、豊後や福部、名古屋、知多、伊勢などを結ぶ重要な港でした。古来の儀式に由来し、明治34年から伊勢神宮に絹糸を献上する行事「お糸船」は、かつて福江港から出航していました。

(広報たはら 平成23年12月1日)



8

須賀社



参道の向こうに何が見えますか？
常夜燈は何を照らしますか？
私のおうちも照らしていますか？



須賀社

【豊後バス伊良湖本線「古田坂上」下車、徒歩5分】

創立・勧請年月日不詳

祭神 須佐之男命

寛文10(1670)年11月15日、領主戸田淡路氏経から黒印状を受け、以後代々の継目をし明治に至った。

(須美町の神社 須美町史編さん委員会)

神社脇の狂言場に定小屋(屋根付き舞台)があり、古田の天王まつりの際、青年団を中心にして演芸大会が催されていた。地元の人等の素人芝居や地方巡業の芸人、映画会などが盛大に行われていた。

(「須美町の民俗探訪(愛知須美町農業協同組合)より抜粋)

(筆者注:「定小屋」は近年取り壊された)



9

与加楼・角上楼



海の料理はいかがですか？
海の方からやって来て、
海の方へと帰る皆さま。
海のお宿はいかがですか？
ようこそいらっしやいました。
このままどこまで歩いて行ける
でしょうね。



与加楼・角上楼

【徒歩バス伊良湖本線「福江」下車、徒歩2分】

明治20年代以降汽船の発達によって活況。明治30年代になると農家の圃の生産も盛んになり、ますます活況をみせる。明治末期から昭和初期にかけて、原の島・天神地区へ商店が急テンゴで広がるが、その中心地は「下地」であった。下地には、呉服太物商、洋品店4軒、雑貨商5軒、料理飲食店6軒、青物商3軒、金物商2軒、時計商2軒、その他、米穀肥料商・味噌醬油石炭商・石炭商・小間物商・はきもの商・菓子商などがあり、料理業旅館業のようなサービス業も多く、芸妓置屋もあった（昭和初期）。

（「福江の歴史（田原市博物館）」より抜粋）



10

城坂（しろざか）（人造石）



城坂（しろざか）（人造石）

【徒歩バス伊良湖本線「福江」下車、徒歩2分】

何の変哲もない石垣のように見えますが、よく見てみると、石と石のすき間がかなり離れていて、普通の石垣とは違うことがわかります。またコンクリートの壁に石が貼られているようにも見えますね。

実はこの工法は「人造石」工法と呼ばれるもので、鉄筋コンクリート工法が普及する前の明治10年から昭和初期ごろまで大規模な工事にも使われていた工法です。福江町の人造石遺構は、形の整った花崗岩を使い、見た目も美しく、田原市で確認された中では一番すぐれた遺構と言えます。

（広報たはら 平成20年11月15日）



11

福江市民館



福江市民館

【豊後〆伊良湖本館「福江」下車、徒歩1分】

昭和5年（西暦1930年）昭和天皇の即位を記念して、福江町役場として建てられました。

建物は左右対称の幾何学的なデザイン、外壁上部の模様の装飾が特徴的です。

建設以来 太平洋戦争、東南海地震・三河地震、伊勢湾台風などをくり抜け、福江町役場、瀬美町役場、商工会、土地改良区の事務所として長く利用されてきました。

(市民館前看板より抜粋)



12

校区概要

清田校区

清田校区は、福江湾に面した田原市北西部に位置し、面積は約830haで、市内20校区中10番目の広さです。国道259号沿いに市街地や農地が混在し、校区の南部は山林地帯、北部は福江湾に面した自然豊かな校区となっています。

福江校区

福江校区は、田原市西部に位置し、北部が瀬美湾に面しており、面積は約7.3平方キロメートルです。地区の中央には南北に二級河川免々田川、東西に国道259号があり、国道を中心に台形に南北に広がっており、中心部には福江市街地、北部には農漁業の向山地区、周りには農地といった商業・農業・漁業と混在し、旧瀬美町の中心部となっていますが、まだまだ自然豊かな校区であります。

(田原市校区まちづくり推進計画書 田原市総務部総務課地域係)

中世

平安～鎌倉時代 伊良湖東大寺瓦窯跡、皿山古窯群、皿焼古窯跡群、大アラコ古窯跡等、やきもの(瀬美古窯)が盛んとなり、中世における窯業の一大産地を形成

近世

貞享4年(1687年) 松尾芭蕉が愛弟子杜国を訪ねて瀬美(保美町)を来訪
※この時、杜国とともに伊良湖を訪れ「藤ひとつみつけてうれしいらご崎」の句などを詠む

明治

明治30年(1897年) 福江村が町制施行により福江町となる
明治39年(1906年) 清田村、福江町、中山村が合併し、新たに福江町となる

大正

大正時代全般 福江港を中心として物資の流通が盛んとなり、下地・原ノ島・天神の商店街が発展した

昭和

昭和30年4月 福江町、伊良湖岬村、泉村が合併し「瀬美町」誕生

平成

平成15年8月 田原町・赤羽根町が合併し「田原市」が誕生
平成17年10月 田原市と瀬美町が合併し新「田原市」が誕生

13

3. 4. 3 bookpic での閲覧

bookpic の特徴は、誰でも「つぶやき」を書き込んだり、「いいね (vote)」を投票したりできることである。書き込んだ様子を図に示した。



ここで  は動画、 はウェブサイトへのリンクである。

3.5 おひろめ会開催

3.5.1 おひろめ会の目的

おひろめ会は次の目的で開かれた。

- a. 今回の事業の成果報告
- b. 出席者が電子書籍を実際に触る体験
- c. 図書館が「お散歩」をおこなう意義について討議
- d. 図書館が電子書籍を作成することの意義について討議



3.5.2 おひろめ会のプログラムと参加者

日時 2月21日(木) 午後1時30分～午後5時

会場 田原文化会館1階101会議室(田原市田原町汐見5番地)

プログラム

13:30 開会あいさつ (豊田高広: 田原市図書館)

13:40 基調講演「お散歩活動と電子メディアを活用したまちおこし」(岡野裕行: 皇學館大学文学部)

14:30 実験事業の目的と概要(豊田)

14:50 「お散歩」ワークショップ報告(岡野)

15:10 「e本(電子書籍)」制作報告(時実象一: 愛知大学文学部)

15:30 休憩

15:40 討議「電子書籍が開く地域づくりの可能性と課題」(岡野、時実、満尾哲広: フルライトスペース株式会社、豊田)

16:30 質疑応答

17:00 閉会

出席は田原市関係者5名、各地図書館関係者10名、大学関係者7名、企業4名、田原市図書館関係者8名の計34名であった。出席者には、作成したEPUBをコピーした合計10台のiPadが配布され、電子書籍に実際に触って読んでいただいた。

3.5.3 おひろめ会の概要

概要は以下のとおりである。なお、当日の配布資料と詳細な記録は「資料編」に掲載した。

(1) 基調講演「お散歩活動と電子メディアを活用したまちおこし」(岡野裕行：皇學館大学文学部)

岡野氏は、図書館情報学と日本現代文学が専門である。博士論文のために三浦綾子記念文学館での調査をおこなったことをきっかけに、文学館に興味を持った。文学資料は実は文学館という建物に限られず、広く地域に存在するということから、「まちなか」に関心を持つようになった。また文学館は図書館・博物館・文書館の役割を持つことから、MLA もしくは MALUI 連携にも関心を持つようになった。

皇學館大学に赴任後、古地図を電子化するプロジェクト「伊勢ぶらり」に参画することができた。この過程で、アプリを持ってまちを歩く「まちあるきワークショップ」を2回開催した。

「さんぽ」というキーワードは、本としても広く使われているテーマである。図書館の目でまちの「さんぽ」を実施し、素材を加工してデジタル化・発信することにより、「まち」や「ひと」の「ものがたり化」をおこなうことになる。それが今回の「お散歩e本」の事業である。



(2) 実験事業の目的と概要(豊田高広：田原市図書館)

本事業は「田原市と愛知大学との連携・協力に関する協定書」に基づく、田原市と愛知大学の委託研究契約により、愛知大学に委託したものである。事業の目的は次の3点である。

- (1) 地域の存在価値を目に見えるようにする。すなわち、電子書籍として作成し、観光や学習に活用する。
- (2) 地域に密着した新たな図書館の具体的なイメージを示唆する。すなわち、ワークショップとして地域を調査し、その成果の発信をおこなう。
- (3) 未来の「司書」教育のモデルを提示する。すなわち、図書館という建物や制約から外に出てみるというものである。

そのために、愛知大学と田原市図書館の打ち合わせに基



づき、清田・福江校区において、福江市民館の協力を得ながら、愛知大学・皇學館大学の学生によりワークショップを実施し、その成果を電子書籍としてまとめた。

(3) 「お散歩」ワークショップ報告（岡野）

ワークショップは2012年8月24日に田原市清田・福江校区において実施した。参加者（計15名）の内訳は次のとおり。

皇學館大学（教員1名・学生10名）

愛知大学（教員1名・学生1名）

田原市図書館館長（1名）

福江市民館主事（1名）

ワークショップの目的は、学生に「図書館がまちあるきのイベントに関わること」の意義を考えてもらうこと、観光者としての目線を通して田原市を見ることで、自分の生まれ育ったまちについても考えるきっかけにしてもらうことであった。その結果、学生には、まちやまちに住む人びとが持っている「ものがたり」に関心を持ってもらえた、また公共図書館がこのように情報を集めて発信することの意義を考えてもらえたと思っている。当日の様子を写真で紹介する。

(4) 「e本（電子書籍）」制作報告（時実象一：愛知大学文学部）

電子書籍には大きく分けて「テキスト」「画像」「PDF」「インタラクティブ」などがある。「テキスト」は Kindle や iPad で読む普通の電子書籍である。自分の持っている書籍をスキャナで電子化（自炊）したり、国立国会図書館の蔵書電子化は「画像」である。またレイアウトが重要な電子雑誌は「画像」である。「PDF」は主に学術出版で使われる。「インタラクティブ」は絵本など動きのあるものに使われている。

「お散歩e本」はテキストを EPUB として作成し、iPad の iBooks で読めるようにした。これには動画も埋め込まれている。また画像（JPEG）からなる電子書籍を bookpic というサイトで公開した。こちらでは、動画やウェブサイトへのリンクが貼れるほか、読んだ人がコメントを書き込んだり「いいね」ボタンを押すことができる。



(5) 討議「電子書籍が開く地域づくりの可能性と課題」（岡野、時実、満尾哲広：フルライトスペース株式会社、豊田）（文中敬称略）

全体の感想がまず述べられた。満尾からは、このような事業では、「きっかけづくり」が重要であり、また継続性が問題であるという指摘があった。時実は電子書籍がウェブサイトなどと異なり、パッケージであるという特徴を指摘した。岡野は学生が自分で歩いて、素材としてテキストや絵を描き、それが電子書籍という成果になったことは、教育上よかったという感想があった。豊田は、今回のような事業は図書館単独ではできない、多くの人の協力が必要と述べた。



次に「地域づくり」について議論した。満尾は北海道立図書館で「MLA 連携による地域アーカイブと共同利用」についての研究会など、共通する動きがあることを報告した。このようなアーカイブのツールとして、電子書籍という形態は有効である。時実は、アーカイブにおいてはコンテンツの分散・統合が進んでおり、その中で電子書籍もひとつのツールであると指摘した。岡野は「地域」や「まち」は地元の人、あるいは外から来た人たちの共通の話題になることを述べた。

豊田は、このような事業を進めていく上での仕組みについて質問した。満尾は、自分がまず動くことで相手を動かすことが必要で、「連携」だけでなく「連動」が大事だと指摘した。時実は大学をもっと活用して欲しいということ、また「司書」ということばが「囲い」になっていることから、「文化情報資源」という見方も必要であると述べた。岡野は、学生に「本のない図書館を考えてみてください」、あるいは震災のとき「図書館の建物と人とどちらが大事か」と質問していることを紹介した。

この後質疑応答で ATR クリエイティブの高橋は、今回の取り組みで図書館と大学が協同したことを評価した。田原市博物館副館長の鈴木は、今回の報告や議論を今後の博物館の進め方に活かしていきたいと述べた。



岐阜市立図書館からは、今回の事業での図書館員の関与と予算について質問があった。田原市図書館渥美分館の横田は資料の収集などに協力している。

今回の予算については豊田から 90 万であるとの回答があった。時実は、大学が協力した場合費用の算定は難しいことを指摘した。ATR クリエイティブからは、その予算では企業では難しい旨発言があった。

最後に豊田が、「連携」から「連動」へといういいキーワードが出てきた、博物館の鈴木館長からもいいお言葉をいただいた、動きのある図書館を作っていくために電子書籍がきっかけになるといいとのまとめを述べた。



3.6 「お散歩 e 本」の著作権について

3.6.1 著作権の帰属

「お散歩 e 本」で私用したテキスト、写真、動画、絵地図等の著作物の著作権は、それぞれ著作者に帰属し、特に譲渡処理はおこなっていない。著作者は以下のとおりである。

●本書の制作に携わった人たち

岡野裕行（皇學館大学） 時実象一（愛知大学文学部） 山本昭（愛知大学文学部） 豊田高広（田原市中央図書館） 横田元彦（田原市渥美図書館）

●ワークショップ参加者

稲葉梨紗、岩上奈々、奥野実希、澤村静香、下村有那、田窪宏美、濱田めぐみ、堀口みあき、山下あさみ、山本暉通、木下英恵

●表紙および本文デザイン 辻 浩子

●発行 田原市図書館 〒441-3421 田原市田原町汐見 5 番地

<http://www.city.tahara.aichi.jp/section/library/>

解説部分で引用した各種資料については、著作権法第 32 条にいう引用とみなし、出典を示したが許諾処理はおこなっていない（一部は単に「参考」として出典を示した）。

各項目に掲載した地図は、国土地理院の電子国土基本図を「電子国土ポータルサイト（電子国土 Web.NEXT）」(<http://portal.cyberjapan.jp/site/mapuse4/>) で検索し、加工して用いた。利用においては、国土地理院「申請フロー」(<http://www.gsi.go.jp/LAW/2930-flow.html>) にある、「刊行物等に少量の地図を挿入」の第一項、「書籍等の 1 ページの大きさに対し 1/4 以下の大きさで地図等の一部を掲載する場合」にあたりとみなし、申請はおこなわなかった。この項目の全体は以下のとおりである。

8. 「刊行物等に少量の地図を挿入」とは？

刊行物等の内容を補足するため、下記基準程度の少量の地図等を補助的に挿入する場合

◇書籍、冊子、報告書、リーフレット等

- ・書籍等の 1 ページの大きさに対し 1/4 以下の大きさで地図等の一部を掲載する場合
- ・書籍等の 1 ページの大きさに対し 1/2 以下の大きさで地図等の一部を掲載場合
→ 書籍等の総ページ数の 30%以内
- ・書籍等の 1 ページの大きさに対し 1/2 を超え、1 ページに収まる大きさで地図等の一部を掲載する場合 → 書籍等の総ページ数の 10%以内
- ・書籍等の内容に合致する地図等の一部を書籍等の表紙に利用する場合

◇Web サイト等

- ・ 300×400 ピクセル以下の大きさで地図等の一部（ラスタ形式）を掲載する場合
 - ・ 300×400 ピクセルを超え、画面に収まる大きさで地図等の一部（ラスタ形式）を掲載する場合 → Web サイト全体の中で 5 枚まで
- ※ スクロール機能により画面以上の地図が見られるような場合は 1 枚でも申請を要します。

3. 6. 2 公開にあたっての著作権の取り扱い

本作品をなるべく広く利用していただくため、作成した電子書籍はクリエイティブ・コモンズ

の「表示・継承」ライセンス  を利用することとした。「表示・継承」ライセンスは次のようなものである。

「原作者のクレジット（氏名、作品タイトルと URL）を表示し、改変した場合には元の作品と同じ CC ライセンス（このライセンス）で公開することを守れば、営利目的での二次利用も許可される CC ライセンス」
(<http://creativecommons.jp/licenses/#licenses>)。

CC ライセンスを利用することについて、本作品の著作者のうち、本事業参加者には了解をいただいた。また引用した記事のうち、田原市の著作物については、了解いただいているとみなした。愛知県立福江高等学校の著作物については、同校に了解をいただいた。

したがって、本作品については、自由にダウンロードし、また営利・非営利を問わず他の出版物に転載し、あるいは加工して転載することは、原作者（田原市）のクレジットを表示する限り許諾なしに可能である。

4. まとめ

4.1 「お散歩活動」の実践から：「動き」をもたらす図書館サービス

それぞれのまち独自の特色ある図書館サービスを提供するには、継続的な地域資料の収集と活用が欠かせない。そしてそういった地域資料をできるだけ有効に活用するためには、それぞれのまちの風土や地域環境に合わせた「動き」をつくりだすような仕組みが必要となる。「動き」とは、図書館という場を通じて情報資源が利用者に提供されるという「物の動き」という意味もあるが、利用者や図書館職員が共同でつくりあげる「人の動き」による相互交流の機会や場づくりという側面も含まれる。

さまざまな人たちが共通の目的のもとに「動き」始めるためには、何らかのきっかけが必要である。図書館職員と利用者とが相互に向きあうような機会を意図的につくりだすために、何らかのワークショップやイベントをしかけてみることは、「人の動き」をつくりだすための有効な方法となるだろう。小布施町立図書館まちとしょテラソや奈良県立図書館情報館などのように、図書館が積極的にイベントを実施することによる場づくりの実践例は増えており、あるいは川口市メディアセブンが実施しているワークショップを中心とした活動のように、既存の図書館サービスの可能性を広げるような空間も誕生している。

今回の「お散歩e本」プロジェクトで実施してきたように、ワークショップのひとつの形態として、図書館の建物を飛び出してまちに繰り出す「お散歩活動」というイベントの設計が考えられる。「お散歩活動」を実施する際には、その土地ごとの歴史や風習、食文化などの特色に注目してお散歩のテーマを設定してもいいだろう。あるいはまた、文学・美術作品などに関係するような、アートの舞台としてのまちなかをめぐる文学散歩や美術散歩という着眼点も、「お散歩活動」のテーマとしては面白いものになるだろう。

私たちの日々の生活における数々の衣食住にまつわるできごとを、以上のような「お散歩活動」の文脈に置いてみると、地域に関する情報を散歩者の視点で体系化することができることに気がつくだろう。こういった「お散歩活動」のテーマとして取り上げられるさまざまなキーワードは、それぞれのまちの特色が言葉として現れたもの（まちの面白さが凝縮した視点）と考えることができる。今回は田原市を舞台として、図書館が中心となって「お散歩活動」を実施してみたが、散歩の舞台となるまちを別の場所に変えてみれば、それぞれの地域ごとに独自のキーワードが見つかるはずであり、ほかの地域でも応用が可能な取り組みになると考えられる。さまざまな観点から自分たちのまちの特色を探り、「お散歩活動」のキーワードを増やしていくことは、公共図書館が関わろうとする地域資料の収集と活用にも繋がることになるだろう。最初は単なる思いつきでも構わないので、「自

分が暮らしている身近な地域を舞台としてまちを見歩くには、こういったテーマを設定すれば面白くなるだろうか」を考えることは、地域資料を活用した図書館サービスを考える際のヒントが得られるはずである。

「お散歩活動」から電子書籍づくりにまで続く今回の一連の活動は、図書館の建物を飛び出そうとする「動き」によって実現できたことである。図書館の役割のひとつには、このようなワークショップやイベントをしかけることによって、「人の動き」をデザインしていくことにあるのではないだろうか。今回の「お散歩活動」からは、ワークショップやイベントを企画する場のデザイン力の必要性を感じることができたが、これからの大学における図書館司書課程の授業においても、図書館の建物にこだわらない形での図書館サービスのあり方を検討することが必要になってくるだろう。

4.2 図書館にとっての電子書籍

今回の事業を通じて、電子書籍が図書館にとって有用な発信ツールであることがあきらかになった。従来図書館の発信ツールといえば、図書館のウェブページのほか、ブログ、ツイッターやフェイスブックなどが知られていたが、今後は電子書籍での発信も考慮すべきであろう。

電子書籍の特徴は次のとおりである。

- a. 書物としてパッケージになっているので、ウェブページやブログより読みやすい。
- b. リンクや動画・音声埋め込めるので、紙の本より面白い。
- c. iPhone/iPad のほか、さまざまなデバイスで利用できる。
- d. ウェブページやブログと異なり、ダウンロードしてあればネットに接続しなくても読める。

従来電子書籍は高度なもので、外注で作るしかないと思われていたが、各種ツールの進歩により、ある程度のものは図書館員でも作成できることが、今回の事業で実証された。ただし、電子書籍はパッケージであるから、製作には次のような手順が必要である。

- a. どんなコンテンツを作成するかという企画
- b. その企画に沿った素材集め
- c. 素材の加工
- d. テキストの執筆
- e. 本の美術的デザイン
- f. 電子書籍の編集 (EPUB 他)
- g. 公開手段の選択

h. 公開作業

i. 評価

これらの手順においては、大学・企業を含めた協同体制が重要となると思われる。そのような協同作業の実証をしたと点も、今回の事業の大きな成果といえることができる。

4.3 「連携」から「連動」へ

「おひろめ会」の討議において、出席者の満尾哲広氏から示されたキーフレーズが、“「連携」から「連動」へ”であった。MLA連携という言葉に象徴されるように、世間には「連携」が満ち溢れているが、多くの場合、●●協議会や〇〇推進会議の名簿に名を連ね、年に数回の会議で場を共有することがある、というレベルにとどまっている。それでは、たとえば地域社会を活性化するといったインパクトなど持ちようがない。どうしたら、静的（スタティック）な「連携」を、動的（ダイナミック）な「連動」に変えていくことができるか。「電子書籍」と「お散歩活動（に代表されるワークショップ）」の組み合わせはそのきっかけとなり得る、というのが、今回の実験事業で得た感触である。

以上のような観点で、本報告書の1.2に示した本事業の目的の達成状況を振り返ってみよう。

第一に、地域の存在価値を目に見えるようにする、という目的についてである。今回制作した「お散歩e本」だけで十分に、清田・福江の独自の魅力を伝えることができたとは思わない。しかし、たとえば音声や映像を取り込み、また、さまざまな関連ウェブサイトとリンクを張ることで、印刷物では不可能な情報の可視化を行い得ることは示すことができた。もちろん、公開の方法が適切であれば、印刷物では達成することができないような広がりを持った「読者」を得る可能性があることも分かった。こうしたことは積極的な「連動」への動機づけとなり得る。

第二に、地域に密着した新たな図書館の具体的なイメージを示唆する、という目的についてである。「電子書籍」と「お散歩活動」の組み合わせで「連携」を「連動」に変えるきっかけとするという視点からは、「電子書籍」の制作や「お散歩活動」のためのミーティングなどに使えるスタジオやラボのようなイメージが浮かび上がってきた。そうした機能がまずあり、その機能を実現するために必要な環境は何か、というところから、環境を構成する要素の一部としての施設（空間）のありかたを考えていくべきだろう。

もちろん、図書館だけがそのような機能を担う機関である必要はない。しかし、「電子書籍」の素材の蓄積があるという点、電子書籍という「出版物」の収集・提供にあたる機関であることに法的正当性があるという点、そして情報編集をその役割の本質とする司書という専門職がいるという点から、やはり図書館への期待は大きい。特に、最後に述べた点は、第三の目的と関係している。

すなわち、第三の、未来の「司書」教育のモデルを提示する、という目的については、司書の本来的な役割を再認識しつつ、「連携」を「連動」に変えるために、プロデューサー、コーディネーターあるいはファシリテーターとしての能力が求められることが明らかになった。もちろん、もはや図書館という「館（やかた）」において図書館の役割が完結することはない、ということが大前提である。「お散歩活動」や電子書籍制作への学生たちの参加は、こうした司書に求められる新しい資質に関する重要な示唆を与えるものであった。

5. 活動履歴

ここでは、時系列的な活動記録にとどめ、議事録等詳細は資料編に記載した。

2012年8月7日（火）15:30-17:00

第1回担当者打ち合わせ（愛知大学）

2012年8月24日（金）

ワークショップ（田原市清田・福江校区）

2013年1月21日（月）15:30-17:00

第2回担当者打ち合わせ（皇學館大学）

2013年2月21日（木）13:30-17:00

「電子書籍で地域づくり！～「お散歩e本」おひろめ会」（田原市文化会館）